

## エスニック紛争と自治

ダウ・ローネン

ハーバード大学国際問題センター

山本 二葉・訳

国際基督教大学大学院行政学研究科

## **Ethnic Conflict and Self-Rule**

Dov RONEN

Center for International Affairs

Harvard University

Translated by Futaba YAMAMOTO

Division of Public Administration

Graduate School of International Christian University

本論文は国内紛争の理解に新しいアプローチを提供しようとするものである。この論文は2つの基本的な命題もしくは前提にもとづく。

第一に、紛争に関わるのは人間 human beings であって、集団 groups ではないということがひとつ。人間は「自由」と「経済的幸福」 economic well-being を含めた自分たちの2つの希求を充足しようと、「目覚め」 awaken, 「立ち上がり」 arise, 「反抗する」 rebel ののである。この2つの希求を満たすことをより効果的に追及するためにも人間はそれぞれ長期・短期の違いはあるが、一時的に集団をつくる。このような集団は、それが人種、階級、言語、性、障害、宗教、エスニシティ、あるいは民族であれ、このような認識可能なアイデンティティのいずれかが活性化がされることで形成される。エスニックなアイデンティティが活性化されるとき、自治 (self-rule) を通じて人々は2つの希求の充足を得ようとする。

第二の命題は、国家の中のエスニック紛争を解決するのに必要なのは、国家にもとの平和を回復することではなく、国境を改定するか、あるいはその国の性格を変えるかのいずれかであるということである。ここに提示されている2つの命題は以下のテーマにつながっていく：現存する枠や制度に人間をどのように合致させるかではなく、どのような枠や制度が人間に合致するか<sup>1)</sup>。

この新しいアプローチの提示は、まず国内紛争の理解に向けてなされる事例研究のアプローチに対する批判から始まる。これらの事例研究は国や地域の専門家によってなされるが、事例研究はこれまでに紛争に参画するのは集団であるという考え方を定着させた。次にこの論文は、この新しいアプローチの中心的なコンセプトである「国家 state」「政府 government」「人間の希求 human needs」「アイデンティティの活性化 activation of identities」の考え方について探究する。最後にこの論文は自治とエスニック紛争の考え方について論じる。この論文の目的は、個々の提案やアプローチ全体に対する議論を呼び起こし、将来の共同研究への可能性を探るところにある。

## 1. 事例研究によるアプローチがもつ落とし穴

事例研究は、何年もかけて定着してきた。そこには時とともに国民や学問の関心対象が、一事例から別のものへ、世界の一地域から別の地域へ変わってきたことがその背景にある。例えば、1992年、6月下旬頃からアメリカのテレビニュースや新聞報道はモルドバのロシア人とルーマニア人の間にみられる対立に焦点を当てるようになった。それより先の6月上旬には、ボスニア・ヘルツェゴビナのセルビア人とムスリム人の対立がニュースを独占した。数カ月前には、国民やジャーナリスト、外交上の関心同様に学術的な関心はクロアチアのセルビア人とクロアチア人の対立に集中した。さらにさかのぼれば、これらの関心は南アの氏族間の闘争、北アイルランドの宗教紛争に占められていた。

しかし、このように関心や注目が次から次へと変わっていくのは、最近の現象ではない。19世紀半ばから第二次世界大戦までは、ハプスブルク帝国やオスマン帝国に注目が注がれていた。その結果、自決を通じて解決されるべき少数民族や民族間の国内紛争に焦点が当てられていた。第二次世界大戦後は、非植民地化の中で焦点は民主主義国家の建設に移り、国内紛争の問題は、(朝鮮やヴェトナムにみられるように) 共産主義勢力対反共産主義勢力という冷戦の図式で吟味されるか、(アフリカの顕在的、あるいは潜在的国内紛争が、植民地支配を引き継いだアフリカ統一機構 OAU による国境の合法化で不都合なことが大部分おおい隠されたように) 沈静化されることになった。

1970年代初期には関心はサブ・ナショナリズムや言語対立に脅かされる西欧国民国家の政治不安定に移った(スペインのバスク人、イギリスのスコットランド人、ベルギーのフラマン人、ワロン人、カナダのケベック人、フランスのブルトン人)。これらの解決策として憲法上の改正が提案され、政治の安定は回復したようであった。このため、西欧の事例に対する関心は1980年代の後半から弱まり、続いて東欧やソ連のエスニック紛争に移った。(スリランカ、スーダンなど) 第三世界の国内紛争に対する関心は依然として変容し続けた。

これらの紛争やそれ以外の紛争の研究は、主に歴史家や政治学者などの国や地

域の専門家によってされてきた。世界の一地域に配属されたジャーナリストは、様々な特色をもった事件について報道した。このことは各国政府の政策や「国益」を念頭におくということを除けば、外交官についても同様にいえる。当然のことながら、いずれの国内紛争も特有な歴史的、文化的、イデオロギー的な状況の中で考察され、独自の専門用語を確立してきた。国や地域の専門家は、各々特有の用語や方法論を用いて、その事例に個々の解決策を提案した。実際、いずれの紛争も独自のものであるかのように提示されている。

国家や地域に対する見方が変わるにつれて用語も同様に変わりやすい。例えば、アフリカで過去に用いられた「部族紛争」は1960年代を過ぎると「エスニック紛争」へと変わった。南アでは政治闘争という用語に置き換えられた。「階級闘争」ということばは、イデオロギー的な意味があることから、西側の専門家は西側世界の紛争については用いなくなり、代わって「サブ・ナショナリズム sub-nationalism」に置き換えられ、「テロリズム terrorism」のような1970年代のイデオロギー的な状況に合致した他の用語に取って代わられた。

異なった事例を連関させる学術的試みも学術論文にはみられる。その中の一つに Walker Connor(1978) によってなされたものがある。書物となったものは中東や共産主義政権、第三世界のような特定の分野に焦点を当てた。(Esman and Rabinovich, 1988; Connor, 1988; Horowitz, 1985; Thompson and Ronen, 1986) John Burton の古典的な研究のような例外も昔からのパターンを変えていない。1960年代末のピアフラの離脱と今日のモルドバの国内紛争の間の相関性の可能性を考えることはほとんど興味がないようである。また、スリランカの事例の研究者とケベックの事例の研究者との間には共有できる情報の可能性があることやバルト諸国の分離は進行中のスコットランドの分離の試みと類似性があると考えることにほとんど関心がない。(エスニック紛争の) 歴史は、バルカン半島で「繰り返される」かもしれないが、同じ歴史でもアフリカとの関連性を考えることはない。

## 共通の要素

このように関心や焦点が移り変わり、概念の違いがみられても、実際には国民の向ける関心や過去・現在にわたる国内紛争についての学術研究は、ほとんど世界のどの地域でも一貫して2つの共通要素を示している。

ひとつには、ほとんどすべての国内紛争についていえば、人の集団---人種集団、エスニック集団、労働者、サブ・ナショナル集団が行為の主体となってあらわれている。集団は、多かれ少なかれ突如として他の集団あるいは政治に対して「目覚め」awake、「立ち上がり」arize、「反抗する」rebelする。世論やジャーナリスト、同様に学者らも、平和的な関係が異なる集団間あるいは場合によっては特定の集団と政府の間に戻るように、特定の集団の対立が何故起きたか、また集団の対立を弱めたり、除去するには何をすることができるかを見出すのに関心をもつ。

第二に、国内紛争を防止し、対処し、解決するのに提案されるあらゆる方法において通常、国家の国境は不変とされる。まして国家の存続はいうまでもないことである。国内紛争を防止し、対応し、解決するのに提案される様々の方法は地方分権化から自治に至り、憲法改正から地域機構、国際機構による介入にまで及ぶ。これらの方法のすべてにおいて国民国家は不可侵のものともみなされている。

このような視点の背後には、国内紛争は国内秩序の対概念であるという論理が存在する。国内紛争の解決には国内秩序の回復が必要とされる。国内紛争が国内秩序の崩壊であり、いずれの事例も独自であるならば、個々の紛争解決もその国家の既存の法律で定められ、国際的に認知された国境内でなされなければならない。紛争解決の任意の手段や方法はすべて、国内紛争の発生する国家内部の政治的安定を求める。

この2番目の論点に関する明白な反例は、もちろん、ソ連の例である。ソ連の国境改定は---今ではユーゴスラヴィアを新たに加えるものもいるだろうが---認められないことではない。しかし、この例は現実というより見かけのものである。

というのもソ連はこれまで多くの人にとって正当な国民国家ととしてとらえられたことはなかったし、他の政府をいくつか考えてみても、ユーゴスラヴィアも同様に国民国家とみとめられたことはなかった。どちらも人工的で帝国共産主義的な構造をもち、ごく最近解体して「真の」国民国家として再構成されたとみなされるようになってきている。旧ソ連やユーゴスラヴィアの新／旧いずれの国民国家に起こる国内紛争に関し新／旧の国民国家の国境が不変となると考えるのは妥当性があると思われる。

国境の法律上の不変性や国家の不可侵を問題にするにはいくつかの理由がある。まず、仮に人類の平和が第一次的な関心であるとしたら、国民国家の存続や国境を含めた他のものすべては第二次的なものになる。第二に、仮に国家が自然な現象であり、発展の過程の産物であるとするならば、現存する国家は所与のものとして受け入れられるべきである。しかし、国家はこのいずれでもなく---また、対立する階級に課された権力でもないことから---所与のものとして受け入れる必要はない。最後に、紛争の解決に使われる「憲法上の」手段はすべて---憲法の規定・自治・人権擁護・地方分権化その他---しばしば国民国家の内部の変革や、また国民国家それ自体の変革に代わるものとして次善のもの以上ではないということは明らかのようにみえる。エスニック紛争を通じて求められる支配からの自由への熱望は即ち自治への要求であり、それはしばしば国家の国境や性格の変革を必要とする。

これらの共通の要素---集団と国民国家---を両方無視することは国内紛争の問題への一層の理解を容易にするし、とりわけ、そのような紛争の解決への理解を容易にするであろうと思われる。というのも、国内紛争を研究する目的がその防止や対応、解決、それにも増して重要である平和の達成にあるとすれば、この目的のみが不変であるべきである。私はここで順番にこれら2つの共通の要素にそれぞれ焦点を当てていく。

## 2. 何が「国家」で、何がそうでないか

日常的な話し言葉と書き言葉でも、学術論文でも「国家」という言葉は同様に「政府」の意味を持つ。即ち、「国家による経済統制」は「政府による経済統制」を意味する。「国家と社会の関係」は「政府と社会の関係」を意味し、「他国の事柄への国家の介入」は「他国の事柄への政府の介入」を意味する。以上挙げた例の中で「国家」はすべて政府や支配者や行政つまり国家の中の制度や組織を意味する。

これは単なる言葉の問題だけではない。体系的な研究にとってこうしたことばの互換性は非科学的で、不正確で、不適切であり、とりわけ国内紛争の研究に害をもたらす。

国家と政府は異なった歴史をもつことがありうるし、しばしば異なった歴史をもつ。したがって、1940年にドイツがフランスを占領した際のフランス政府にみられるように国家が軍事的に支配されたり、併合されることがあっても政府は亡命先で機能し続けることもある。また、イスラエル人のように出国して他国の市民権を得たとしても、移住元の国の政府の法律に従い続ける者もある。国内紛争の中には政府（その政策および／または行動）に関連しているものもあるし、国家（その国境および／または存在）に関連しているものもある。国家を政府に置き換えてつかうにはなんら正当な理由がない。特に研究においては「私が意味するところはわかるでしょう」ということは十分ではない。

次に国家の検討をし、続いて政府の検討に移る。「国家」ということばは現在国連の加盟国を構成する170数カ国にそれぞれつかわれており、「政府」は国内の人物や人物の集団につかわれている。

## A. 国家

我々がここで言う170数カ国の「国家」はそれぞれ国境を持ち、その国境は、一定の大きさの領土内に居住する人民を取り囲み、人的資源や物質的資源をもつ。ここで順番にこれらのことばについてそれぞれ簡潔に言及する。

ほとんどの国の何十万、何百万ものかなり多くの人々は、まず第一に大なり小なり、多くの点で互いに異なっている。簡単にいうと、すべてにおいて全く同一の人間は二人としない。第二に、ほとんどの国で人は様々な宗派と深く関わり、異なった民族起源をもち、また異なった教育水準をもつ。このことは、ほとんどの国は社会文化的に異質であることを意味する。第三に、人的・物質的資源の量や種類はほとんどの国でも限りがある。人的資源の中には十分に教育や訓練を受けた科学者も多少を問わず含まれ、教育や養成を受けてない者もまた多少を問わず含まれる。物質的資源の中には石油、鉱物、耕地、水などが少量または大量に含まれる。即ち、人的・物質的資源のたくわえはすべての国において程度の差はあるが、限られている。最後にそして最も重要な点なのだが、社会的文化的に異質である多くの人間と、ほとんどの国でも乏しい資源を取り囲む国境は、恣意的に引かれたものであるということである。

国家と政府はそれぞれの固有性を明らかにする異なった起源や歴史をそれぞれに持つ。

### 国家と帝国の起源

初期に建設された国家（たいてい帝国と言及されるが）は、おそらくすべて川岸におこったということについては一般的に意見の一致がなされているし、歴史的にいっても正確であると思われる。川に隣接する土地への灌漑の必要が初期の帝国の出現をもたらしたという広範に支持されている理論がここから生まれた。

「水文明」の出現の理論を提唱した一人、Karl A. Wittfogelは川の近くの土地に水を引くことは労働、計画、規模を監督する組織者を必要とし、こうした人々



はただ灌漑を統制するだけでなく政治的統制を手中にし、行政を設立し、防衛体制を確立し、初期の帝国の指導者となったと主張する (Wittfogel 1981)。

帝国の起源について広く支持される Wittfogel の理論についての筆者の最初の異議は、この理論が初期の帝国の支配者の起源を説明するものであり、帝国自体の起源を説明したものではないことである。言い換えれば、Wittfogel の理論は2つの異なった概念を混同した一つの例であるといえる。

しかし、初期の国家 (あるいは帝国) が川岸に建設されたことは事実である。そして、これまで論じてきたように国家=人+資源であるとすればそれに関連して以下の問題点があげられる：どのようにそして何故、河岸に居住していた種々雑多な村落コミュニティの人々が帝国の「市民」となったのか。例えば古代エジプトの場合、何故そしてどのようにしてナイル川のデルタ地帯に沿った北のコミュニティが遠く離れたナイル川の南の地域の村落コミュニティの人々と同じ市民になったのか。Wittfogel らは川沿いのコミュニティの人々は帝国を築く目的で自発的にお互い集まったのではなく、なんらかの力が彼らを結合させるように強いたという一致した見解をもつ。エジプトの場合、北からの Nemes の軍隊が南の国土や人々を征服したということが知られている。

しかし、Wittfogel らは先に提示した要素の存在を見落としているように思われる。彼らは、川から2、3マイル少し離れたところでは土壌が貧しく、安全が得られないという点を見落としている。川沿いの居住者たちが自ら帝国の人民となったのは、それ以外に選択の余地がなく、どこにもいくところがなかったためであった。灌漑地を離れて移り住み、逃れていくような土地は他にはなかった<sup>2)</sup>。古代エジプトの場合、氷河時代の終結によって人々や乏しい資源は、数世紀間かかってナイル川の兩岸に閉じ込められた。人々は、数世紀間にわたって続いたサハラ砂漠やナイル川周辺の砂漠化の進行で、やむなく国境内にとどまり、社会的、政治的、経済的苦境を甘受することを余儀なくされた。

川の存在やその周辺への灌漑の必要性が帝国の出現にとって不可欠な決定的な要因ではなかった。川と灌漑は定住農業や技術的發展、そして「文明」と呼ばれているものの出現にとって必要であった。しかし、これらはすべて帝国が現れるかなり前から出現した。国家や帝国は、人類の平和的な関係はもとより、農業が繁栄し、技術が発達し、芸術活動が栄えるために必ずしも必要なものではない。そのような繋がりがみられるのは、国家と政府（行政、「法と秩序」を含めて）と文明の相互に区別がなされないためである。

初期の帝国の起源は、外部の力の介入によって川沿いのコミュニティーが集結した結果によるということを歴史は示す。初期の帝国以来、外部の力は国家の出現にも影響をもたらした。かつて存在した国家はいずれもしばしば外部の力の間接的な介入によって起こっている。このような外部の力は、征服戦争（ポーランドの一部のような）、大規模な移住（フン族のアッティラやアメリカの西岸への移住）、植民地の形成、政府間の条約（レバノンやシリアの国境を定めた条約のような）、購入（アメリカのマンハッタン、ルイジアナ州、ハワイ州、アラスカ州）、王家の結婚（イギリスとスコットランド）、平和会議（第一次世界大戦後にパリやベルサイユなどで開催されたようなもの、第二次世界大戦終結に向けてヤルタで開かれたもの）などであり、他にも、さらに遡れば14世紀からヨーロッパで封建国家の形成に影響を与えた黒死病のような現象を幅広く含む。要するに、国家の出現、国家の消滅、帝国や国家の国境、人民の構成、国境内の人的・物質的資源の量や種類は、歴史的に偶発的にもたらされたものである。国家とは、領土の一部に閉じ込められた人と資源である。<sup>3)</sup>

人間の歴史の中で特定の国家の人民が自発的にお互い集結し、あるいは自分の周辺の特定の場所に国境を引き、その国家を維持するためにそこにお互い留まることは、いつの時代にもなかったというのが筆者の論点である。例えば現在の合衆国市民の先祖のほとんどは、世界中のいろいろの国から移住することを強いられている。イスラエルのユダヤ人のほとんどもまたそうである。ベラルーシやタジキスタンの住人は、自らすすんで旧ソ連の市民になったのではない。また、オ

クシタン人やブルトン人も同様にフランスの市民になろうとしたのではないし、他にもカタルーニャ人やバスク人もスペインの市民になろうとしたのでない等々。後になって、人々は既存の国境の内部のすでに存在する国家を維持するようになった。それは、人々が、国家の存続により自己の安全と幸福が得られると信じたからである。そして、その限りにおいてである。

つまり、国家は農業が定着したコミュニティから発展したのではない。国家は「十分に発達した」部族や他の原始的な人間の集団ではない。樹木や人間などの、生きた有機体と違って、帝国や国家は生物進化の結果でもたらされたものではない。飛行機・印刷機・耕耘機などの多くのテクノロジーの驚異と違って、帝国や国家は進歩の結果ではなく、人間の才能の産物でもなく、原始コミュニティが現代的に変形したものでもない。また、生産手段の変化の結果生まれた対立する階級を抑えるために作り出された力でもない。

なんらかの大きな強制力や主要な外部の力が働くことでコミュニティの人々を結集させることになった。国家や帝国はコミュニティに外部の力の影響が加わることで出現したものであることを示すには十分な根拠があるように思われる。外部的要因とは、時間をかけて人々やコミュニティ、その他の人々を結集させ、線で描かれた領土の中に閉じ込める力である。よく知られる帝国や国家はすべてそのような外部的要因がなんらか存在したため、特定の時と場所に起こった。

## B. 政府

筆者は「政府」という用語を国家の中の特定の人物あるいは特定の人の集団に用いる。これらの人々は、国内の人間の平和的な関係を維持し、国内の人的・物質的資源を「取り扱う」権威や権力あるいは、そのどちらも持っているため「特定」なのである。「取り扱う」ということばには、「統制」や「干渉」、「代表」あるいは「宣言」、同様に規制、投獄、分配、立法などの政策と行動が含まれる。

これらの政策は内政的なもの（立法、命令、パスポートの発行、許可、免許、銀行の規制、物資の管理、課税など）と外政的なもの（輸出・輸入の促進・禁止、移住の規制、外国の政府の認可、国際機構への参加、宣戦布告など）がある。政府の政策と行動（また不活動）は経済的発展、インフレーション、人民の奴隷化、階級形成、貧困、人種的隔離、都市化、内戦、文化的・技術的発展、生産やコミュニケーションの手段の変化、犯罪の増加や減少などを結果としてもたらすかもしれない。これらはすべて国家の歴史にを構成するものではなく、支配者や政府の歴史を構成するものである。

政府の出現を論じるには、今一度古代エジプト帝国の支配者の出現を検証する必要がある。このことによって、後の時代の支配者や政府の類型をも同様に提示できるからである。

## 古代エジプトの支配者の起源

エジプトの統一は、上下エジプト間に起こった戦争によって直接もたらされた。上下エジプトは豊かな土地の周囲を取り囲むようにそれぞれ離れた場所にあった。エジプトの統一がなされると、ファラオに支配される最初の王家が誕生した。Fairervis(1962:83)のことはよれば、「ファラオはもはや運命に恵まれた人間でなく、彼自身が運命そのものであった---2つの王国に繁栄と安定をもたらす肉体をもった崇拜されるべき地上の神であった」。神王は超自然的なものを体現する人間、法の根源であり、主権そのものであった。ファラオはすべての人間の上に立つ者であるため、社会・文化的に異質なエジプトの人々の意思と選択を越えてファラオの法は優先された。神王は法律を課すためでなく、至高の力をもつファラオの法からの逸脱を罰するために権力を用いた。

一神教は主権の考え方に变革をもたらした。一神教はエジプトから砂漠に逃れた元奴隷の古代ユダヤ民族によって導入、制度化されたといわれる。特に十戒の原則をたずさえて山を降りたモーゼによってなされたといわれる。变革は多神教

がひとつの神に置き換えられただけではなかった。神王と異なって一神教の考え方の重要な点は、新しい神は最上の神より権威と権力を受けとるということにあった。

最初の帝国の出現から絶対王政時代、啓蒙主義の時代に至るまでずっと支配者の権威と権力の根源は最上の神にあった。絶対専制は教会から権威を授かった。それから再び変革が起きた。啓蒙運動はフランス革命の時に最高点に達し、この革命は権威と権力の源としての最上の神という無定形の考えを「人民」あるいは「人民の意思」という新たな考えに置き換えた。

人民が選挙した市民政府であろうとなかろうと、また、クーデターによる軍事政権であろうと、権威や権力の源泉は「人民」から発することが要求されるのが重要な点である。こうした要求や人民によるその認知は、国内の社会・文化が異質であることから不可欠であると政府は考える。「人民の意思」は総意を表現するだけでなく、現実にある異質性を神のごとく神聖な一体性に妥容する。この考えは普通の人間を超自然な専制者に格上げする。

### 3. 人間 human beings, 人間の希求 human needs

人類は50億人ほどいるが、人間はそれぞれなんらかの重要な点でお互い異なる。それぞれ共通した特徴をもつ人もいれば、もたない人もいる。共通する特徴をもつということは特定の言語のコミュニケーション、文化的・宗教的儀式への参加、文化集団や政治組織への参加などを可能にする。そのような共有された特徴はしばしば誇りや、名誉や、独自性の意識を生み出す。人間はこのように、たくさんの「選ばれた人々」からなる。

筆者が歴史を見る限り、宗教的、民族的、イデオロギー的、人種的また他のいかなる特徴に起因する人間相互の相違は、紛争を誘発することはなかった。人の間にある違いそれ自体は紛争を生み出さない。また、人の間やそれぞれの政府とのイデオロギー的またその他の相違が、紛争を生み出すことはない。異なる特徴をもつ人間の集団はいつの時代にも世界中のすべての地域に平和的に隣接して

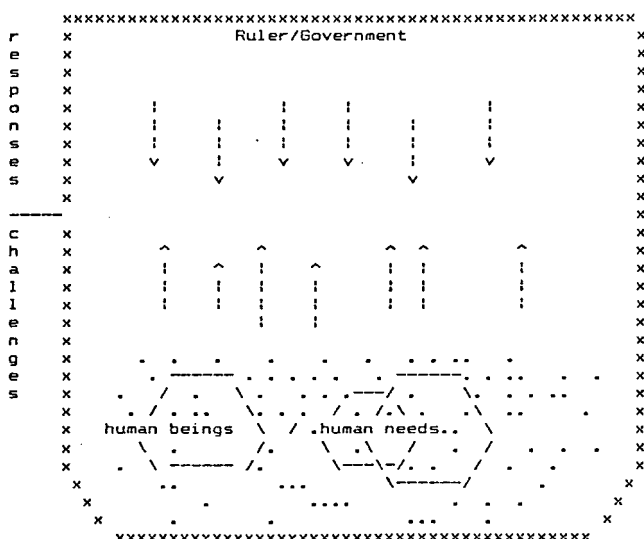
住んできた。(カトリック教徒とプロテスタント、セルビア人とクロアチア人、黒人と白人、イスラエル人とアラブ人、裕福な者と貧しい者、ルーマニア人とロシア人など) 国内紛争は人の間に差異があるから起こるのではない。

だが、すべての人間が共有する特徴はある。人間はみな、「自由」と「幸福」への熱望を持っている。もっと正確に言えば、人間は皆2つの希求を充足したいと思っている。一つは心理的な(精神的な)希求であり、もう一つは物理的な希求である。これらは一般的に抽象的な表現でそれぞれ「自由」と「幸福」と呼ばれている<sup>4)</sup>。この両方の希求が満たされることは人間の物理的・心理的な生存のために不可欠なのである。有機体としての人間はこのどちらも満たされる必要がある。国内紛争はこの2つの希求のいずれかが満たされていないと感じられたときに起こる。

人間はすべて同じ精神的・物理的希求をもっており、日常生活でこの2つの希求を満たそうと絶え間なく努力している。また人間はこの2つの希求が満たされるような状態がつくられることを政府に期待する。

下記の図は、人と政府の間の相互関係をあらわす。

A SCHEMATIC ILLUSTRATION OF CHALLENGES AND RESPONSES WITHIN THE STATE



この図の中で下部にある点は2つの希求をもつ人間を表し、点線の枠は人が共有する特徴を表し、外枠は国家の国境を表し、↑は人が希求を満たすために支配者／政府に提出する要求であり、↓はこれらの要求に対する支配者／政府の対応を表す。

このモデルは国家や時代によって要求の強さが異なることを示しはしないが、暗示する。そして政府は国内の少数の人々であろうと、多くの人々やほとんどの人々、あるいはすべての人々の2つの希求の一方あるいはその両方を満足させようと、努め、満たすこともある。このモデルはまた物質的希求を満たす人的・物質的資源は植民地や輸入、移住などによって国外からもたらされることも含んでいる。

## 紛争 Conflicts

人間相互の対立や集団と政府の間の紛争は何によって引き起こされるのか。

人は自分の「自由」や「幸福」が単に脅かされたと感じたり、また実際奪われたと感じたときにこれを獲得するため積極的に闘おうとする。現実の闘争はことばや文書による抗議で始まり、場合によってはそれだけで終わる。またエスニック集団や労働者、女性、政党のような集団を通じた闘争で始まり、継続することもある。集団を通して活動的におこなわれる闘争は、集団と国家の政府の間の国内紛争や「自分」が所属する集団と、政府から特権を与えられ、政府に代表される他の集団との間国内紛争を誘発することもある。政府や他の集団が第一の集団が起こした行動によって行動を起すこともある。失業者によるデモンストレーションの鎮圧のために軍隊を出動させることは、失業者の起こした行動に対してとった政府の対応であるといえる。しかし、失業者は食べ物への物質的な希求を満たすための手段を供給するような雇用を見出す経済的状況を、政府が作りださなかったためにデモンストレーションをおこなったのである。異なる集団が2つ以上あるときにも似たような相互作用は起こりうる。筆者がここで指摘したい唯一の点は、この相互作用のどちらの場合も、希求が満たされないときに国内紛争が

引き起こされるということである。

この議論のもつ意味を強調するのは有益であると思われる。というのは、政府が民主的であろうとなかろうと、特別なイデオロギー的立場をもっていようとなかろうと、企業を促進しようがしまいが、それは政府を評価する適切な基準ではない。筆者の論点の意味するところは、崇高な主義や望ましい形とされることを約束するだけでは十分ではないということである。政府の仕事の評価する適切な基準は国家のすべての人が求める2つの希求が満足されているかどうかということである。

## アイデンティティの活性化

人が内在する特徴を強調したとき、その人はアイデンティティを活性化したことになる。多くの人々が共有するアイデンティティを活性化したとき、集団や「私たち us」が生み出される。

アイデンティティの活性化は「私たちの our」状況に責任があるとみられる「彼／彼女 him/her」あるいは「彼ら them」との二極化により引き起こされる。「彼ら them」はその国家の政府である場合もあるし、その国家の他の市民である場合もある。紛争の敵対者である「彼ら them」はアイデンティティが活性化された者には障害であり、「私たちの our」状況を改善するために打ち克たなければならない障害物である。

アイデンティティが活性化されたとき、特性のうち肯定的なものは「私たち us」に付けられ、否定的なものは「彼ら them」に付けられる。「私たち us」の集団の中には信頼が増し、「彼ら them」に対しては信頼が失われることになる。「私たち us」と「彼ら them」の間の分化が一段とはっきりし、明確化されると、「私たち us」を認識することはたやすくなる。「彼ら them」は「私たち us/our」と私たちの目標の間の妨げとなる。しかし、「私たち us」とは「私 I」が個人的な目標



---それは「私たち us」すべてにたまたま共有されるものだが---を実現しようとする手段にすぎない。

このように、それが共通した言語、宗教、人種、性、社会的地位、経済的状況、あるいはエスニックな起源であろうと、人間は共有するアイデンティティを活性化させ、集団を形成し、行動を共にする。しかし、これはその共有するアイデンティティを保持する目的でなされるのではない。共有するアイデンティティは、人間の希求 human needs を満足するために維持される。時が経てば、人間は認識可能な特性の中から別のアイデンティティを活性化させ、新たな集団を形成し、行動を共にすることもあるし、ときには外国に移住することで個人的に自分の目標を追及することもある。

どんなに永続的な集団であれ、支配的な集団であっても、すべての集団は、集団としては、共有するアイデンティティが活性化されている間のみ、紛争に加わる。エスニック集団や民族集団でさえ、人間のアイデンティティが活性化されることによって引き起こされる。アイデンティティの活性化がなければ、その人は何人かとだけ共有する特性をもち、他の人々とは共有することなく、特定の言語でコミュニケーションし、特別の文化・宗教儀式に加わり文化集団に参加するようなことはできない。エスニシティ ethnicity, 階級 class, 民族 nation を理解することは、エスニック紛争、階級闘争、国家紛争を理解する鍵にはならない。有機体としての人間とその行動を理解することが紛争理解への鍵となるのである。

2つの希求において人間や人間性を一度理解すれば、平和への貢献に必要な変化を一層理解しやすい。というのもエスニック集団を含む集団は、すべて暫定的な集合体であるからである。エスニック集団を含めたすべての集団は、そのメンバーが2つの希求を満足するために共有するアイデンティティを活性化させ続けるかぎり存続する。その目標が達成されたと感じられたとき、活性化されたアイデンティティの強さは、弱まるか消滅するであろう。消滅することのない唯一のアイデンティティは人間というアイデンティティである。2つの希求をもつ人間

というものが永続的に続く人類を構成する単位である。

この論点を提唱するのは私だけではない。簡潔にするため、私と同じ見解を持つと思われる R. Paul Shaw and Yuwa Wong(1987: 25) の強い影響力をもった論文から一部分だけをここでは取り出す。「我々のモデルは、基本的なユニットとしての集団を拒絶する限りにおいて、エスニックな動員・集団行動を説明しようとする従来の試みとは異なる。代わりに、我々は分析の基本的なユニットとして個人を考えるアプローチをとる。したがってエスニックな動員を有意義に研究するため、エスニシティがもつ作用は、究極的に個人の意志決定過程のレベルに基づいていると考えるべきである。この観点からは、「集団」という概念は与えられているものとして受け入れるより守らなければならないものである。」

### 「指導者 Leaders」

様々な種類の集団は、人々を立ち上げる可能性をもち、共有するアイデンティティを活性化させることができる「指導者」によって形成される。ここではその機能について言及し、必ずしもその個人的な特性について論じないため、「指導者」ということばは括弧の中にくくる。牢獄からの釈放や、成功に終わった軍事行動の指揮、人気のある映画スターなどの好ましい状況は、潜在的な「指導者」をつくりだす。このような潜在的な「指導者」が現実のものとなるには2つの条件が必要となる。人は2つの希求のうちいずれか、またその両方を実際的に奪われたり、奪われる恐れを抱かなければならない。そして、それが「自由」であろうと「幸福」であろうと、人間的希求を奪われる脅威をもたらしたり、それを剝奪するような何者かが（人物、集団、政府）眼前に現れなければならない。このように、二分化された「彼ら them」をつくりだすことは、剝奪された「私たち us」のアイデンティティをうまく活性化させるのに欠くことができない第一の要素である。

「指導者」は考え方や原理の伝達者にもなる。教育や個人的な経験を通じてこ

のような考え方に触れることもしばしばある。このような考え方や原理は、文書や聖書、哲学者の見解、合衆国独立宣言、フランスの「人間および市民の権利についての宣言」の中に含まれていることもあれば、歴史から引き出されていることもある。

ことばや文章によるコミュニケーションによって「指導者」によるアイデンティティの活性化がされやすくなることもしばしばある。このようなコミュニケーションはよく旗や十字、ハンマーとかまのような象徴を使って強調される。また「指導者」は祖国 father land, 母国 mother land, 故郷 home land, 兄弟 brothers and sisters などいずれ支持者となる人々になじみのあることばを使ってエスニック・アイデンティティ、民族アイデンティティの活性化を促進することもある。これらの言葉は日常的に接する家族ユニットの中から引用されているためなじみやすい。このように、集団の構成員は「兄弟 brothers」「姉妹 sisters」「同志 comrades」「市民 citizens」「同類 one race」「民主党员 Democrats」「大衆 the masses」「抑圧されたもの the oppressed」となる。

「指導者」が人々を首尾よく動員し、共有するアイデンティティをうまく作り出すために思想や主義を普及させようとする一方で、彼の動機や行動、目標は必ずしも知られていない。「指導者」は、実際は個人的な利得に基づいて動いていることもあるし、主張する思想や主義を実行する能力はないことはもとより、なんの目的ももっていないこともある。すぐれた「指導者」をつくりだすには、いかに理念が崇高であるかでなく、大多数の人々のアイデンティティの活性化をいかに効果的にもたらすことができるかが問題となる。

詳細な性格づけがいかに正確であろうとなかろうと、「指導者」はアイデンティティの活性化にとって欠くことができないというのが私の論点の根底にある。「指導者」がなければ、国内紛争も起こることはない。

## エスニック紛争と自治

家族のメンバーは母語で話し、家の中で文化を吸収し、両親の信仰する宗教を信じるようになる。核家族も大家族もあるが、「家族 family」は世界中どこにもある。同じ言語を話し、同じ文化をもち、歴史的な起源を共有し、一つの宗教を信仰するような家族をまとめて一つの大きな家族に類似するものとみて、エスニック集団、民族 nation あるいはナショナリティ nationality と表現するのはそれほど難しくはない。

家族とエスニック集団、民族 nation、ナショナリティ nationality の間に明らかな共通点があるにもかかわらず、エスニック集団と民族 national 集団は、メンバーの2つの希求を満足させようとするアイデンティティの活性化の産物でもある。エスニック・アイデンティティとは2つの人間の希求 human needs を満足するためにすぐにも活性化することができる認識可能なアイデンティティのことをいう。活性化のメカニズムは同じである。アイデンティティの活性化がなければ、人は一定の特徴を単に共有し、異なる特徴をもつ他の人と平和に隣接して生活することができる。このような違いは、人類学者、社会学者、世論調査家にとって興味がある。エスニックなものと呼ばれる共有するアイデンティティが活性化されるときだけ、エスニック集団、あるいは民族 nation があらわれる。そして、この集団が紛争に関わるとき、それはエスニック紛争あるいは民族紛争 national conflict となる。

世界中のほとんどの場所で「エスニシティ ethnicity」と言うべき特徴を共有する人々が、一定の土地に、隣り合わせて、あるいは国家の中の一地域に生活してきた。したがって、ここで前掲の図について言うならば、これらのエスニック集団の要求の幅と政府の対応は、活性化されたエスニックアイデンティティや民族アイデンティティと階級、性、イデオロギー、障害などの他の活性化されたアイデンティティを区別するエスニック集団あるいは民族集団に固有の要素をもうひとつ含んでいる。

階級、性、イデオロギー、障害のアイデンティティを活性化した人の集団は、市民権、代表権、様々な政府機関への参加、表現、あるいは出国の自由、またあらゆる経済的利益の増大などの要求を政府に対して行い、その回答を政府から得る。デモクラシーや私有化とはそういうものである。これらの要求を追及する際に起こる国内紛争の解決には、伝統的紛争解決手段が用いられる。

しかし、エスニック・アイデンティティあるいは民族アイデンティティを活性化し、一定の土地に生活する人々の集団は、単に自由や経済的幸福への要求にとどまることなく、エスニック集団や民族を維持すべく政府の支配からの自由あるいは他の集団から支配される脅威からの自由も要求することもある。エスニック紛争を通じて表される他者の支配や占領からの自由への熱望は自治への要求となり、それは自治や連邦制や、独立などの形をとる。これらの要求のいずれも--特に独立は--国家の性格やあるいは国境に影響を及ぼすことになる。

さて、エスニック・アイデンティティを活性化する人の集団のうち南アの黒人のように数の上で人口の多数を占める場合、また、ボスニア・ヘルツェゴビナのムスリム人のように数の上で少数ではあっても、国内に広大な土地を要求することができる歴史的な権利がある場合、自治や連邦制や独立のような自決を要求することはもはやなくなる。こうした事例では、市民権、代表権、様々な政府機関への参加、表現の自由、出国の自由、また経済的利潤をさらに要求する傾向があり、この過程により政府を構成する権利を獲得しようとする。

問題は一度この目標が達成されたとしても、2つの希求はまだすべての人々に満足できるものではないということである。新しい「指導者」が、新しく共有するアイデンティティ、おそらく新しいエスニック・アイデンティティを活性化するためにあらわれる。このように国内のエスニック紛争は継続される。モルドバのアイデンティティの活性化はモルドバの中のロシア人やスラブ人のアイデンティティの活性化を妨げることはなかった。またスロバキア人のアイデンティティの活性化が、スロバキアの中のハンガリー人のアイデンティティの活性化を妨げることもなかった。民主化した南アでは、ズールー族のアイデンティティが活性化

されるかもしれない。

もう一つの問題は「指導者」によって公約されるように、自治は、2つの希求のどちらも満足させることができると思われていることである。しかしながら、「自由」は精神的な要求であるため、自治はせいぜい精神的な要求を満足させることはあっても、物理的な要求は満足させることはない。他者からの支配や占領からの自由は、人的・物質的資源を生産することも、物理的な要求を満たす政府の能力を増大させることもしない。税金の改正や品物の均等な配分のような私有化や他の経済的、財政上の措置が一役かうこともあるが、ほとんどの場合、エスニック集団が入手できる人的・物質的資源はそのわずかの土地の中で限られている。このことからエスニック集団あるいは民族集団が自治を獲得すればするほど、経済的資源のより広範囲での共同管理の必要性が増してくる。ここでECがモデルとして合致する。

## 結 び

ホッブズによれば国家は万人の万人に対する闘争を防ぐために存在する。すなわち、国内紛争を防止するために存在する。ちょうどその逆のことが起っている。ホッブズは「万人の万人に対する闘争」、すなわち国内紛争は、国家が存在することによってもたらされるという事実を見落としていた。異質な人々と乏しい資源から成る国家の中のすべての人に2つの希求を充足しようと努力している政府ができ、そのどちらも満足させることは難しい。

Karl Deutsch (1984: 136) は幾分違った形で論じている。

「社会的動員の進展は、トマス・ホッブズの古典的な見解の長期的妥当性--お互いが平和に暮らせることができるような力をもつ強い君主の支配の下に対立する個人や集団をおくこと--に疑問を投げる。人口の流動性が増していく我々の社会ではホッブスの見解はユートピア的である。」

今ではもう古典的研究となっているが、他にもアメリカの有名な政治学者である Kenneth Waltz (1954: 228) は、以下のように述べている。

「社会をまとめるのに必要な力はそれを構成する要素がどれだけ異質であるかによって異なる。」言い換えれば、「国家」という存在は単に対立する階級の間に「秩序」を維持したり、あるいは逸脱者を統制をするためだけでなく、第一にそして基本的に、そこに居住するいろいろな人々の2つの希求を満足させるために政府を必要とする。Waltz と Deutsch はともに、どれだけ力を行使することが不都合であろうとこの仕事を達成する方法は現存する国家の中で見つけ出されなければならないと主張している。Deutsch が言及しているところによれば (Deutsch: 39.), 「分裂が深刻で、非常に危険になるおそれがあるところでは現在の分裂した集団が一時的に離れて暮らすことは、人命を守るため最も非人間的でない方法だといえる。」(下線筆者)

ナショナリストとは不自由とみなされているものから個人の自由を獲得するために戦う人のことをいう。男女の平等の権利や経済的、文化的、言語的、宗教的、人種の平等のために戦うものたちもこの中に含まれる。しかし、後者が憲法上の手段による対応を必要とするだけであるのに対して、前者はしばしば国民国家の構造的な変革を必要とする。

## 注

- 1) この論文は現在執筆中の一部分を抜粋したものである。私はこの中で国家の起源と政治史について考察し、人間の精神的な面について論じ、人間と人間の相互依存性、世界中の異なる人間と物質資源の間の依存について指摘し、未来の世界秩序のいしずえとして提示したい。この本の仮題として、*Complementarity: The Human Revolution toward the Future World Order* を考えている。
- 2) Michael Mann (1989) を参照せよ。
- 3) 外部の力は、また国家の再編成も招く。例えば、バングラデッシュは東パキスタンから外力によってつくられた。
- 4) 2つの希求についての私の理論は、アメリカの歴史家である故 Carroll Quigley の研究にもとづく。Quigley (1979) は人間は「可能性 potentialities」を持っており、人間の有機体的

内部過程を通じて、「本能的要求 drive」が人間の希求 human needs に変換されると主張する。Quigley は要求を精神的希求 psychic needs と物理的希求 physical needs の2つの集合に分けた。それぞれいろいろな希求を含んでおり、場合によっては重複するものもある。リストは不完全なものではあるが、精神的な希求の中にはプライド、自由、自尊心、尊敬、信頼、愛、感謝などが含まれる。物理的な希求の中には物理的な幸福を維持する食糧、水、住居、他の人間、原材料、技術資源などが含まれる (Quigley, 1979: 56)。このように、実際 Quigley の定義するところによれば、人はそれぞれ2つの希求をもつ有機体である。

## REFERENCES

- Burton, John W. 1969. *Conflict and Communication*. London.
- Connor, Walker. 1978. "A Nation is a Nation, is a State, is an Ethnic Group, is a . . ." *Ethnic and Racial Studies*. 1: 377-400.
- Connor, Walker. 1984 *The National Question in Marxist-Leninist Theory and Strategy*. Princeton, NJ.: Princeton University Press.
- Deutsch, Karl W. 1984. "Space and Freedom; Conditions for the Temporary Separation of Incompatible Groups." *International Political Science Review*. 5: 125-138.
- Esman, Milton J. and Itamar Rabinovich. eds. 1988. *Ethnicity, Pluralism, and the State in the Middle East*. Ithaca: Cornell University Press.
- Fairservis, Walter A. Jr. 1962. *The Ancient Kingdoms of the Nile*. New York: The New American Library.
- Horowitz, Donald L. 1985. *Ethnic Groups in Conflict*. Berkeley, Cal.: University of California Press.
- Mann, Michael. 1986. *The Sources of Social Power*. volume I. "A History of Power from the Beginning to A.D. 1760." Cambridge: Cambridge University Press.
- Quigley, Carroll. 1979. *The Evolution of Civilizations*, Indianapolis: Liberty Press.
- Shaw, Paul R. and Yuwa Wong. (1987) "Ethnic Mobilization and the Seeds of Warfare: An Evolutionary Perspective." *International Studies Quarterly*. The Journal of the International Studies Association. 31.
- Thompson, Dennis and Dov Ronen. eds. 1986. *Ethnicity, Politics and Development*. Boulder, Colo.: Lynne Rienner Publishers.
- Waltz, Kenneth N. 1954 *Man, the State and War, A Theoretical Analysis*. New York: Columbia University Press.
- Wittfogel, Karl A. 1981. *Oriental Despotism*. N.Y.: Vintage Books. (Originally published by Yale University Press. 1957.)